

教材名 「フィンガーボール」 (日本文教出版 4 年 p.156 「礼儀」)  
「フィンガーボール」 (廣濟堂あかつき 4 年 p.92 「礼儀」)  
「生きた礼ぎ」 (学校図書 4 年 p.78 「礼儀」)

## 1. 本教材について

▼ある国の女王が、外国から来た客をもてなすためにパーティーを開いた。客人がフィンガーボールの水を飲んだのを見て、女王は自分も同じようにフィンガーボールの水を飲んだ。作法通りに女王がフィンガーポールで指を洗ったなら、その客はどんな思いをしたことか。・・・(ここまでの内容は各社共通)

そのあと【日本文教出版】と【学校図書】では、「お客はあとで自分の間違いを知ったとき、女王のとった態度をありがたく思ったことでしょう。」と続き、女王の行動を「生きた礼儀」の手本として評価している。これでは女王のやり方が唯一の正解であるかのように教えることになり、めざす「考える道徳」になっていない。一方【廣濟堂あかつき】は女王の行動の評価までは記載せず、考える余地をつくっている。

## 2. 本教材を扱う際に、特に注意すべきだと考えたこと

○女王のとった行動が、その時における最善の行動だったとは一概に言えない。はたしてそうすることが善かったのだろうかと疑問を持ったり、ほかの対応を考えたりすることにより、批判的思考や問題解決の力を養う教材として使うのも一案である。

## 3. 指導過程

	子どもの活動や教師の発問等	留意点
導入	<p>○「もし、これが食事の時、テーブルに出されていたら、どうする？」——(予想)水を飲む。</p> <p>○フィンガーボールについて知る。</p>	<p>・水の入ったフィンガーポールを提示。</p> <p>・文化の違いに関心を持たせる。</p>
展開	<p>○前半の部分(お客がフィンガーボールの水を飲んでしまうところまで)を読む。</p> <p>○このあとの展開をいくつか想像し、それぞれについて考える。</p> <p>◆女王か誰かが、マナー違反を注意する。  ——「文化が違うのに、マナー違反だとはいえないね。」「注意されるとお客の気持ちはどうよ？」</p> <p>◆女王は見てみぬふりをする。やり過ごす。  ——「もう飲んでしまった。過ぎたことだから。」「大した問題じゃないから。」「気づかないふりをするのが思いやり。」「他のお客もいるので、そっとしておく。」</p>	<p>・教科書を開けば結末が一見してわかってしまうので、後半を見ないように工夫する。  ——必要な前半の部分だけ提示、教師による音読、など。</p> <p>・どうすることがいいのかを考えるが、どれかを正解としたり、否定したりしないようにする。</p> <p>・考える拠り所は<u>相手の立場に立つ</u>ということを押さえる。</p>

<p>展 開</p>	<p>◆女王はフィンガーボールを使わない。</p> <p>◆女王はフィンガーボールの使い方を伝える。 ——「この国では、こうするのですよ、とさりげなく教えてあげる。」 「知らないことを教えてあげるのは親切。」</p> <p>○教科書を最後まで読む。 ・客と同じようにフィンガーボールの水を飲む女王の行動の意味を考える。 ・「客はその場はでは何も気づかずに過ごせるけど、後にフィンガーボールの使い方を知ったとき、どんな気持ちができるだろう。」 ・「女王は、客が恥ずかしい思いをしないようにと気を遣ってそうしたのかもしれないけれど、後で女王の行動の意味が分かれば、客の気持ちは複雑では？嫌な気持ちになるかもしれない。」</p>	<p>・教科書にある女王の取った行動も、一つの選択肢として考える。（一概に<u>よかつたとはいえない。</u>）</p>
<p>まとめ</p>	<p>・学んだことを書き留める。</p>	

#### 4. 参考資料

3社の教材文は、“吉沢久子作「生きた礼儀と死んだ作法」”のあらすじである。

この作品が収められているのは、「美しい日々のために：少女の生活設計」（吉沢久子著、三十書房、1953年）